

馬追、馬追、家内の留守のよひやみの  
みぞおちにひびき啼出でてけり

\*

欠



見てあれば眉間がいたし、眼がいた  
し、ランプのニツケルをつつむ黒き  
布<sup>き</sup>片<sup>れ</sup>



かすかすわがとげし犯罪のいたま

しきかな、夜半のこほろぎ

ただひとつの蟋蟀が夜を啼明すな

り、うら若き妻はいつか睡入りぬ



隣室に眼ざむる妻もうらさびしあ  
らしとなりし夜半のこほろぎ  
あらし、あらしそれでも蟋蟀が啼し  
きるなり、かかる夜は戀しき母と妻



わがつつみかくす何物もなし何物  
もなしふきすすさむ夜あらし  
まゆるの葉が裂け裂けて泣けり、悲  
し、慌し、夜半をあらしする



横山作次郎氏を悼む

いつとなくほのゑひ來れば手を交  
し幼児のごとうち遊びける

\*



秋の夜の鏡をとればわが鬚のひと  
つひとつが呼吸する見ゆ  
わが鬚のひとつひとつがわが皮膚  
に根ざすを見ればさびしき鏡



まらじらと草生にそそぐ日光は秋

かや、檻ましろの猿啼く晝

山梔の赤き實にふる日光を啄むは

小鳥さびしきは秋



たえまなく障子にきざむかげろふ  
をききつや、妻は、夜半の瓦斯の下  
聽入れば聽入れば夜半のかげろふ  
は、妻はうれはしけじめわかずも



秋風にうす青き實のゆるるなり、こ  
の叢は蛇を生むらむ  
ややのびしあごひげにふれかたは  
らの蒼き實にふれ秋風ふく



大なる鏡をすゑてその前に起居す  
る冬の朝の部屋

妻は部屋の鏡がわれをうばはむと  
するたくらみを知るよしもなし



この掌ぢつと握らば泣くべきか、幼  
兒と、われど、秋の日の下

\*



冬の夜半を、白紙の上、わが指の肌や  
ふればおちてかはく血潮  
灯にすかせば白紙にかはくわが血  
潮、瑪瑙の如し瑪瑙の如し



---

□ M C M X II □

---

幼き記憶の中より

うちわたす越の山べは白雪のふり  
そめしならむ朝の汽笛

---

□ 卷下 愁旅 □

---



いただきに初雪見ゆとあかつきの

戸を入りし母、その手の柘榴

柘榴の實掌にのせつめたさに、うれ

しさに、朝はさめいでしかな



と  
り  
わ  
け  
て  
小  
き  
が  
ひ  
と  
つ  
、  
樹  
の  
梢<sup>うね</sup>  
に  
  
赤  
き  
柘  
榴<sup>しる</sup>  
、  
霜  
の  
著<sup>しる</sup>  
き  
か  
な

\*



わが庭の櫻の梢、冬來れば何ぞうら  
やすげなる櫻の梢

かの高き半鐘の上にひろごれる冬  
の蒼空はいかに遠きかも



秋の日は庭の小石のかげに来てく  
るぐるくまを作りたるかな

\*



陽は牕に、部屋にくまなしわが兒猫  
くるくる肥えて冬に入りけり  
わが手もて兒猫の頸の銀の鈴ふれ  
ば音する冬の朝かな



まつすぐに行けばまつすぐに行け  
るなり、冬の陽の街

烟草すへば烟草のけむり枯草の中  
をはひまはるより、哀し、草に伏す



友の眸に夜半の蒼空が見ゆるとぞ  
酔ひはてて公園をかへり來にけり  
組交したる友の腕のやはらかく大  
なるにかつ酔ひはてにけむ



かぎりなく女をかなしましめむか  
友と議論してかへる冬の夜に

\*



大なる瀬戸の火鉢をか  
抱きてこの夜平和なり

\*



いつかわれまるびふしけむ、重態の

友の體からだのうへ、近く海がなる

みかへれば友の病體、みかへれば海

海はつれなかりけり



泣くにも泣かれず、この病人のやせ  
はててけり

うすひかる海の面をみつむるにた  
へず、かたへの友はやせてけり



口あけて兒雀のごとく餌をとる病

人のくちは兒雀に似き

かはりはてしこの病人にむけむに

はあまりさびしきわれの後うしろかな



いたはられいたはられ若く死しにゆく  
は友よ病は幸なるべし(七首友御白に)

\*



枝をひけば樹の幹が揺れ、くらくら  
とわが踏む地がゆれてわりなし



月光げつくわうの箔のぶを作ることには日は日ごと  
に力つとむるなり、月光の箔こそはまこ  
とに哀しけれ

\*



玉乗の女の眼のギヤマンのかがや  
くは寂し、まことに議論の後のひと  
りの如くさびし

\*



いつの日か、われの事業しごにひとつの  
終をばりを見るべき、それは、母親の生命とと  
もに哀しき

\*



友の鼻柱は鏃やじりの如し、議論の後の卓  
は海の如し、めのまへの冬の夜半

\*



ガラス戸には冬の夜半の黒い手が  
ひつたりとつきて動かす友の睡顔

\*



幼き日の玩具のびやぼんの音ぞ戀  
しきさむうい冬の夜半のめざめに  
は

\*



わが母のはぐろにまして哀しきは  
旅館の夜半のちさき手机

\*



五位鷺が啼過ぐるなり、釘うつ如く  
に、まつ暗な夜空に、かかる時胸にあ  
りし手



夜は褥の上に死人の如くのぼれり

五位驚なく

いかにいかに、汝がねすがたのさも

しきや、凜とした冬の朝の心に



海を見ろ海を見ろ、私の指したのは  
それではない火の海を見ろ



不意に、海は、われらを奪<sup>と</sup>ることはな  
きや、げに、海は、われらを奪<sup>と</sup>らずとい  
ふあかしありや、夜の海



汝らは、かの、たえまなき滴の音を聴  
かずや、ほのぼのと月はのぼりぬ、た  
えまなき滴の音



○りほを悠旅○

大正二年四月一日印刷  
大正二年四月十一日發行

定價金 ~~九~~十五錢

發行者

內藤 策

版權所有

印刷者

長坂 政之助

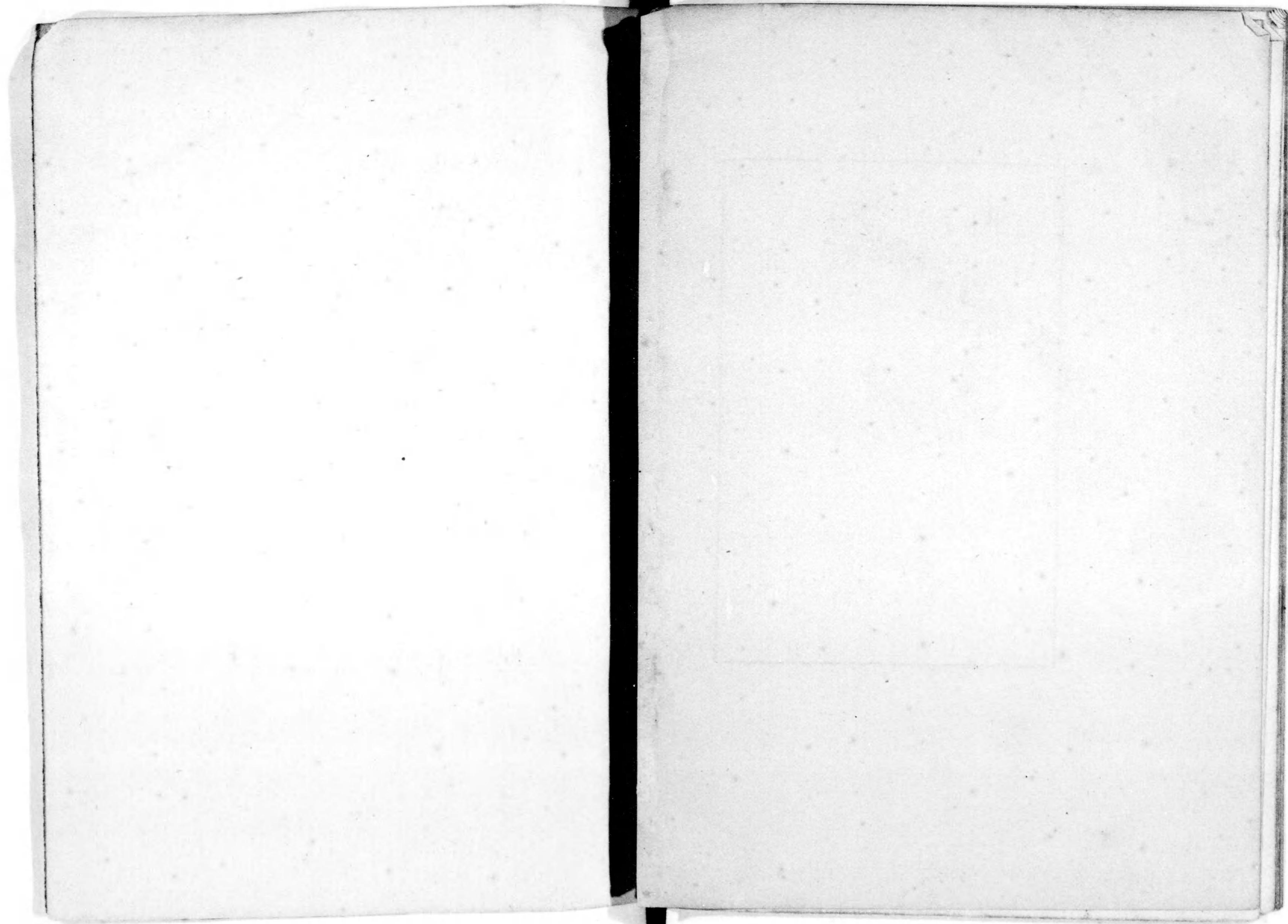
牛込區寶雲町四十四番地

發行所

小石川區白山御殿町八番地

抒情詩社

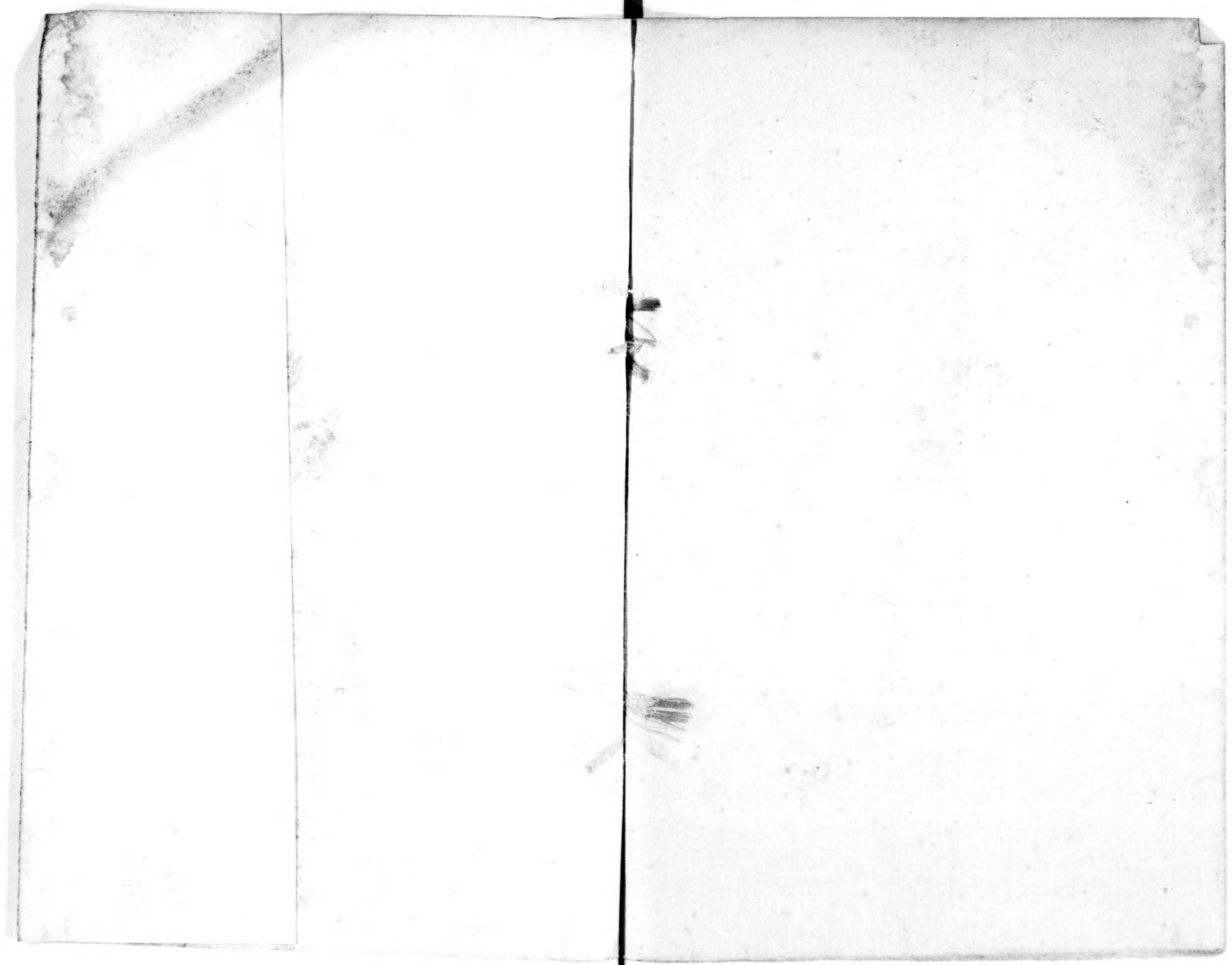






270  
845







終

